

”僕のお父さんはね・・・”

夏の西伊豆町で行われた交流合宿の初日、彼は小学 2 年生で初めて親元を離れてのお泊りでホームシックに罹りさんざん泣いた後、担当していたリーダーの女子学生のお姉さんに、彼が 5 歳の時亡くなったお父さんのことを語り始めた。

お父さんは高校を出てから働き始め、大きなスーパーに誘われて 5 年目の 28 歳の時、友達の紹介でお母さんと出会い、僕ができ結婚した。お父さんの一目ぼれだったそうだって、と嬉しそうに彼は話した。その次の年にはお父さんは偉くなって、そのスーパーの副店長になったんだよ。朝 7 時には店を開け、夜の 10 時にスーパーのレジのお金を計算して店を閉める生活が始まったんだ。お父さんは僕の起きてる時の顔も見れず、ましてや歩き始めた僕の姿も見ることがないんだ。いつも僕の寝顔しか見たことがなかったらしい。

そして、僕が 4 歳になった年、お父さんとお母さんが二人で働いて貯めた 500 万円で建売の今の家を買ったんだ。すごいでしょ！でもね、益々お父さんの仕事は忙しくなり、僕もお父さんと話したり、遊んだりした記憶がないんだ。

そんな生活に疲れたんだって。お父さんは次の年、僕が 5 歳の時「かろうし？」(過労死)で死んじゃったんだ。でもね、ね。お父さんはすごいでしょ。29 歳で副店長になったんだよ。・・・・2 時間近くも父親の自慢話が続いた。

本人には伝えられないが、実は父親は自死だった。そうした時、母親や祖父母、親戚は、極力亡くなった父親の話は控えてしまう。本人も母親の気持ちを察して、母親に父親のことを聴かなくなる。そうすると、自分のアイデンティティの関わる「父の不在」の状態では自己が不安定になり、不登校の要因にもなる。事実、彼は小 1 の 2 学期から不登校になり、母親が私のもとに相談に来られた。

勿論「父の不在」でも母親が安全基地として機能していればその影響は小さいが、最愛の夫を突然なくした母親も不安定になるのも致し方ない。そうした場合は、「不在の父」が子どもと母親の心に肯定的な存在として生き続けることによって、あたかも父親が存在し、母子を見守ってくれているように振る舞い続ける。従って、母親や周りの人たちは、本人に父親について語り、父親ならこう言うだろう、こう行動するだろう、こう望むだろうと話して聞かせる。父親のように立派な存在になってほしいという母親の願いを聞きながら育った子どもは、母親が語った(理想化された)父親を、自分の理想像として自らの中に取り込んでいく。私は母親と祖父母にそのように伝え、彼の中に父親像が取り込まれるのを待った。その結果が前段の彼の父親の話であり、彼は母親から父親は彼が楽しく学校に通っている姿を天国から見守っていると聞かされ、合宿の 2 週間前から再登校を始めた。